

【書評】

犬飼 公之 著

『琉球組踊 玉城朝薫の世界』

山田直巳

十八世紀前半琉球の文化的状況は、如何にしたら捉えることができるだろうか。その命題に挑んだ一つの成果がここにある。組踊という切り口を突破口に、とりわけ玉城朝薫をキーマンとして、中継貿易を事とする琉球とは何であったかを結果として問う事となった。かくして琉球王府が生存するために如何に振る舞い、その帰結として如何ような文化の独自性を形成してきたのかを「組踊の考察」という個別研究に徹底してこだわることによって成し遂げられた、というのが本書の結構であった。

さて、「踊奉行」とは何と据わりの悪い言葉であろうか。琉球王府において玉城朝薫が就いた重要な役職名ではあるのだが、違和感を禁じ得ない。すなわち、語構成 「踊」と「奉行」の結合。「踊」という芸術と「奉行」という取り締まり機構（行政）とはいろんな意味で、馴染まないのではないか。芸術はどこまでもそれ自身にこだわり、その究極において純粋性を要求する。行政機構（組織）は状況や事象に如何に対応し、統合や変容をどう管理・監督するかにある。いわば機能として調整であり、価値として相対的であるほかはない。従って、その両者が同一步調の上であり続けるということは、僅かな僥倖を除き不可能である、ともいえるだろう。しかし、現に歴史的に「踊奉行」玉城朝薫は存在し、中・日・琉球の外交交渉 特に冊封使饗応（冠船の宴）の場で、きわめて重要な役割を果し続けた。となれば、その困難の上にごそ事の本質があり、原点がある、ということに他なるまい。「踊奉行」玉城朝薫の悲劇はまさにここに淵源を持つといえるからだ。

もう一つのポイントは、「組踊」が楽劇という総合芸術であるということだ。「音楽」と「科白」と「身体運動」の三者がまさに三位一体となって、一つの統合をなし得た時、それは全容を現すということであろう。しかも、その三者がいずれも、中・日という二つの価値観の狭間で、外交交渉がスムーズに展開されるよう、よく寄与するものでなければならなかった。そのあり方の困難さは、甚だ隘路を求めるもので、音楽も身体運動も琉球に根ざし、粹組みの儒教思想は中国によった。そして物語素材は、琉球/琉球化された和(日本)による。その三者はあまりに多元的で、統一的調和はほとんど不可能であったのではないか。しかし結論を先にすれば、ここにこそ朝薫の創造力を活かす途があった。すなわち、常識的な予測、調和点が容易に見つかるなら、朝薫自身の独創が発揮される余地はない。けれど事は先に記した通りで、彼の登場を待っていた。ここにまさに<狭間という状況>の中で、「作家」玉城朝薫は、独創性発揮の場を得たのだ。外交交渉という政治の場で、作家としての芸術創造の場で、二つながら成り立たせなければならない、というまことに過酷で困難な対応を求められていたのだった。

ところで従来の「組踊」研究は、音楽と身体運動に焦点があてられるのが常だった、という。それは「組踊」という名称からもわかるように、そして舞踊という観点からも当然であった。しかし、本書の著者、犬飼公之氏は、むしろ科白、とりわけその構想力の持つ力に注目すべきではないか、と強く主張される。本書を拝読した今、この主張をまさに全く諾うべきと賛意を表したい。本書の新しさ、斯界に寄与するところもまさにこの点にあったからである。

さて、内容の具体に触れよう。まず著者犬飼公之氏は、

私は組踊りが劇文学であるという視座に立つとともに、ことばを主として「一つの物語を持つ」という、これまたあたりまえの視座に立とう。言うまでもなくそこで重視されなければならないのは言語表現である。したがって立方(役者)の「詞」(せりふ)と地方(地謡)の「歌」(歌詞)による展開を重視する。

ストーリーは立方(役者)が演ずる舞踊(しぐさ)によっても表現されるし、地方(地謡)が奏でる器楽も深くかわりを持つ。しかし、その中心に言語表現があることはいうまでもないからである。

それは、言い換えると朝薫五番を「文学作品」としてとらえることに等

しい。

と「はじめに」において記し、自己の方法論によって立つ処を宣言した。そしてまた、次の言葉も忘れ難い。

組踊においても一つ見落としてならないことは、これが琉球に花開いた歌舞劇であるとともに、そこに多国籍的な要素が組み込まれていることである。それを国際性といってもいい。むしろそのことにおいて組踊は独自性を持つのであり、組踊の誕生と特質はその国際性に認められるといえる。それは朝薫という「作家」のなみなみならぬ博識によるとともに、琉球国家がおかれた状況とかかわってはぐくまれてきた歴史を持ちあわせていることを意味する。

犬飼氏は、十七・十八世紀東アジア世界のダイナミズムを視野に入れようとしていた。中継貿易を事とした琉球王国を考えるなら、今日の研究状況からは当然とも言えるのであるが、この指摘には重いものがある。さらに次のようにも言う。「本書でとりあげる諸問題をとおして、私はとりたててこと新しい命題を提起しようというのではない。組踊を代表する朝薫五番を、あくまで文学作品としてとらえ、読み解こうと試みるが、そこにいささか確信に似た思いがないわけではない。／舞踊や音楽性をひとまずおき、「作家」としての朝薫に焦点をあて、朝薫五番の文学としての価値を取り出すことによって、組踊の新たな魅力を探りとることができるであろう」。一にも二にも「文学としての価値」を考えたいというのだ。ここに犬飼氏のスタンスの全てが込められていた。

本書は五章十四節、付二編、索引によって構成され、その目次は以下の如くである。

はじめに

一章 朝薫五番の誕生と上演

第一節 組踊の誕生 『球陽』と「家譜」

第二節 朝薫五番の上演

1 冠船七宴 2 組踊の上演 3 朝薫の演出

二章 作家としての朝薫像

第一節 朝薫の人間感

1 朝薫五番の評価 2 自由と欲望

3 世の習いと世の定め 4 「情」の重さ

第二節 社会の窮乏と朝薫 渡りぐれしや

1 風雨の害 2 渡りぐれしや 3 朝薫の限界

第三節 朝薫の宗教感

1 儒教と「時の大屋子」 2 蔡温と朝薫

第四節 一ツ墓の主（朝薫の晩年）

1 厨子嚢の銘書 2 離婚そして再婚

3 室の出自 4 章氏への傾斜

三章 朝薫五番の全貌

第一節 冠船とのかかわり

1 組踊の祝儀性 2 王府の関与

3 「銘苺子」と「由来記」

第二節 通底する論理と意識 引き裂かれた家族

1 儒教と仏教 2 母子の絆 3 父親の不在

第三節 五番のテーマと人物像

四章 組踊の独自性

第一節 雑劇と組踊

1 徐葆光の理解 2 「戯」と組踊

第二節 呼称の揺れ

1 物言う踊り 2 狂言と呼ばれる組踊

第三節 組踊の独自性

1 根生いの芸能 2 日本と琉球 3 中国と琉球

五章 組踊を読む

第一節 「二童敵討」 隠されたアマオへ像

1 故事とのかかわり 2 アマオへの重み

3 だんじゆとよまれる 4 屋良のあまんぎやな

第二節 「執心鐘入」

1 ストーリーの展開 2 愛執に生きる

おわりに

付 朝薫五番台本（現代日本語訳）

玉城朝薫略年譜

索引

以上によって、本書の組立のあらましは理解頂けたかと思う。以下、各章のポイントを指摘していきたい。

第一章で大きく取り上げられたのは、朝薫五番と称せられた「二童敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「孝行の巻」「女物狂」の誕生と上演（一七一九年）をめぐる諸問題であった。そして、

組踊は冊封使を歓待するための目的を体現して誕生した。その背景には自国意識の高揚とともに、冊封関係にある中国に対する意識と、その陰には日本に対する意識があった。そこにはきわめて複雑な歴史的、政治的、社会的なそして宗教的な要請があった。

しかし、それらは組踊誕生にかかる外的な要因である。組踊という作品はそれだけではとらえきれない。中国を意識し、王府を賛美喧伝するための芸能であったり、儒教道徳に立った支配イデオロギーを標榜するだけのものではないし、また、神事儀礼の芸能という枠組みをはるかに越えている。そのことを見落としてはなるまい。

と述べて、甚だ複合した目的を達成するために誕生したという経緯を説き、全体の概括とする。「朝薫は冊封使を歓待するために大宴の前例に倣うとともに、今次大宴の特色を演出しなければならなかった。そして、一七一九年、最初の組踊を作りかつ上演し、大変な好評を博した。王府の期待に十分応えたのである。これを契機として踊奉行玉城朝薫は目覚ましい出世を遂げていくこととなる。

第二章で問題とするのは、「作家としての朝薫像」である。犬飼氏は銘苺子の構造を、

「銘苺子」において松の木にかけられている天女の羽衣を見つけた銘苺子は、それを盗んで行こうとする。それを天女に咎められると、いなおって言う。「俺の松である。俺の井川である。どうしてここに羽衣をかけていたのだ。」それに対して天女は言う。

あなたは物をごぞんじない。天と地の情がめぐり合って生えているというのに、松も玉の井の水も自分の物というのは、無理ではありませんか。

松の木は天地の情が合わさって生えている。玉水も天地の情が交わってできているという。この発想に注目したい。(中略)

「銘苺子」はそのような古代中国の論理を踏まえながら、しかし、「気」や「精」が交わり合して万物が化成するととらえてはいない。天地の「情」が合して松も玉水もあるという。「情」をいうことに特色がある。それは古代中国の論理の展開であって、朝薫の、さらには琉球における発想であったと思われる。

という形で切り取って見せる。さらに、

人間が「個」の自由や欲望をもって生きることを否定してはいなかった。むしろそれが人間一般の性(さが)であるとうけとめてもいた。さらに「情」の重さを認めていた。それは人間性を許容するまなざしであったといえよう。

その人間に向けた複眼的なまなざしあるいは人間を総量的に把握する姿勢によって、彼の組踊は単なる冠船芸能であることを超えて、文学的なリアリティを持った作品と成り得たといえよう。

とも述べて、朝薫の可能性を指摘していた。他方、「朝薫の年上の正室との生活と晩年に至っての離別や、娘ほど年の若い女性を継室に迎えることとどうかわるのか。一方通行の愛を描く朝薫の意識のその陰に、彼の女性に対する屈折した思いがあったのかもしれない。」とも述べ、手放して朝薫を褒めるということとはしていない。

もう一つ大事な点は、朝薫が死に際して「一ツ墓」に入り、「玉城家の墓に合祀され、家族や親族によって祭られることを拒否する意識の表明である。そこには社会的な栄達を遂げ、多くの子に囲まれるようになっても、孤独な魂がなお癒されぬままにあったことを窺うことができよう。」という指摘である。だから陰影に富んだ作品が書けた等という浅い物言いはしたくないが、ここには「父母の離別と、孤独に耐えた幼少年期が深い陰りを落としていたに違いない。」という理解に共感するのである。

第三章は「朝薫五番の全貌」と題して、五番のいちいちについて考察を加える。そして次のようにまとめる。

「銘苺子」「孝行の巻」は王府の直接的な関与をストーリーに取り込むことによって物語はめでたく終わる。それに対して、「二童敵討」や「女物狂」や「執心鐘入」に王府の関与は乏しい。(以下略)

「執心鐘入」と「女物狂」においては僧侶が救い手として登場する。「銘苅子」や「孝行の巻」は王府が救い手となる。その点で、朝薫五番は二分される。そして、「執心鐘入」と「女物狂」には構想や表現の類似がみられる。また、儒教道徳を表立って標榜していない点でも類似する。(以下略)

五番は総じて祝儀性を持ち合わせ、特にそれはめでたく大団円を迎える結末部に顕著であった。しかし、「執心鐘入」の鬼と化した女が祈り伏せられ退散するという結末は必ずしもめでたしで終わるとは言い難い。

「孝行の巻」と「女物狂」には社会の困窮や疲弊にかかる視座がある。特に「孝行の巻」に顕著で、大蛇の祟りによって田畑の作物もことごとく枯らされ、去年も今年も首里への上納ができないといい、間切の百姓たちは餓死するところまで追いつめられているという。

そして朝薫のまなざしを次のように指摘している。

現実を生きる人間そのものに目を向け、それを描くことにおいて、朝薫の組踊は文学的な深みを持ち、その作品は単なる王府のプロパガンダ劇に終わらなかった。結果、彼の組踊は沖縄演劇史のたしかな始まりを刻すことになったのである。

まさに言われる通りであろう。

第四章は、組踊りの独自性を問うもので、中国の演劇との交流・影響関係を検討している。

故事を題材とする歌舞劇を創り、天子の使者である冠船の一行をもてなすという企図は、朝薫や王府の独創なのか、それとも何か規範となるものがあつたのか。そこに浮かびあがってくるのは、中国演劇の影響である。

結論から言えば、琉球王府と朝薫は冊封使を歓迎するにあたって、中国の伝統的な「天子の大宴」を意識したに違いない。そしてまた、そこで催されていた「戯」(戯劇)を思い描いたであろう。王府と朝薫はそうした大宴に倣い、同時に、琉球王国の威信をかけて「戯」(戯劇)を制作し、上演しようとしたのではないか。そこに求められたのが必然的に「故事を以て」作ることであつたと思われる。

さらに、

組踊は一八世紀の琉球に花開いた独自の歌舞劇である。それは琉球芸能の伝統を基盤とし、琉球と中国と日本のかかわりのなかで生まれだつた芸能であつた。組踊は独自性と多国籍性をかねそなえた芸能であつて、それを

いかに読み取り、どう評価するかが、組踊の誕生と特質をとらえるうえで重要な課題となる。

とも述べて、読み解く側の視線も重要であるという。また、

組踊は中国歌舞劇の影響をうけつつ、琉球独自の展開をなしとげたのであろう。矢野氏がいうように組踊は京劇以前の中国古典劇の影響をうけたとみるべきで、崑劇や閩劇を踏まえた比較研究が進められなければならないであろう。

とも述べ、『徒然草』の文言が「執心鐘入」の科白に登場する等するが、「歌」と「詞」の問題等も含め今後の問題としたいとしている。

第五章は、「組踊を読む」であるが、五番の作のいちいちを詞の個々に渡って、組み立て、特色とする点等詳細な検討を加える。そして、様々な制約のあることを認めたとうえで、それにしても、と問うのである。

「執心鐘入」も「忠」や「孝」にかかわらないとはいえない。しかし、くり返していうと、はたして「執心鐘入」は儒教道徳や封建倫理にどれほど密着しているのか、それが問われなければならない。

と言い、さらに次のような発言を続けるのである。

朝薫の視点は人間に据えられている。琉球社会を生きた現在形の人間に据えられている。そしてまさしく琉球社会一般がうけ止めていた制度や秩序と、それに抗して生きる一人の女の情念のせめぎあいを描いたのだった。その人々の共有する常識的な制度や秩序に儒教道徳や仏教思想が渾然一体となって絡みあい、琉歌にいうような「義理」が形成されている。

と。犬飼氏は、「執心鐘入」に食いさがる。朝薫の生き方にこの作が深くコミットしているからである。

末尾に本書の理解を深いところで導く貴重な付録が付けられている。「朝薫五番台本（現代日本語訳）」で、波照間永吉・西岡敏氏の手になる。工夫の凝らされた労作で、本著のために心を傾けられた作である。このような点からも犬飼氏の研究に対するスタンス／アプローチのありようの一端が窺われ興味深い。現地現場主義というのか、滲み出てくるものを待つ（スタンス）というべきか、豊饒な調査研究の日々が想われる。こうした広く深い多様な旅と人脈が想われ、そのことが本書の読後感を豊かなものとしているように思われる。それら全体が本著の背後を支え、それらによって犬飼氏の南島文化／南島文学研

究の成果が非常におおどかな味わいのものになっていると感じる。「朝薫五番台本」は「二童敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「孝行の巻」「女物狂」の全てが掲げられている。

以上紙幅もだいぶ超過したが、全てに及ぶことはできなかった。また各論への言及の濃淡、あるいは理解も適切とは言い難いかもしれない。失当の責は全て筆者にあるが、本書のすばらしさに免じてお赦しを頂きたい。そして、本書を一つの入口として、琉球組踊の世界へと分け入っていかれることを御奨めする。その好個の一冊として、是非お薦めする次第である。

(2004年5月・瑞木書房刊 / 定価3,675円)